

# 私立大学附属・系属高校生徒の学外活動に関する研究

## —学校外での学習と課外活動に着目して—

山本 桃子

キーワード：附属・系属校、高校生、高大接続、課外活動、放課後学習

**【要 旨】** 私立大学を母体とした附属／付属高校（以下、附属校）・系属高校へ通う生徒は、その他の私立高校や公立高校に通う生徒に比べて系列大学への進学が有利であり、入試ルートも複数用意されている。ゆえに、附属・系属校生の学校生活は、いわゆる受験勉強のような学習一辺倒ではなく校外でのさまざまな活動、例えばスポーツクラブや音楽教室といった放課後の余暇活動等に積極的に取り組める環境にあると一般的に認識されている。そのメリットは附属・系属校への入学希望理由にも反映されており、学業に拘泥しない多様な課外活動に彩られた高校生活を送る附属・系属校生像は、世に広く流布されている。

では、実際はどのような課外活動にどの程度取り組んでいるのか、それは一般の高校生に比べて高い割合なのか。さらに、放課後という共通した時間の運用において、課外活動に取り組んでいる生徒の方が、そうでない生徒よりも学校外での学習に消極的なのだろうか。

本稿では、選抜性の高い附属・系属校生を対象に行ったアンケート調査結果を用いて一般の高校生との比較を行い、課外活動への参加実態を明らかにする。具体的には、附属・系属校生の放課後の過ごし方に焦点を当て、学校外での学習や課外活動への取り組みについて実証的な分析を試みた。

その結果、附属・系属校生は通塾や課外活動について、一般の高校生よりも取り組んでいる割合が高いことが明らかになった。また、附属・系属校生の中には学習にも課外活動にも積極的な生徒が存在し、課外活動に取り組む生徒の方が学習時間が長い傾向が確認されるなど、放課後の課外活動に取り組むつつ学習もないがしろにしない生徒像が浮かび上がった。一方で、課外活動にも学習にも消極的な生徒群も存在し、附属・系属校生の中で内部分化が起きている実態が示された。

## 1. 問題設定

### 1-1. はじめに

2021年より実施された新大学入試改革への懸念や私立大学の定員厳格化に伴い、近年私立大学の附属・系属校の人气が高まっている。ベネッセ教育情報サイトによると、その志望理由の大部分は「併設大学への進学保障」であるものの、附属・系属校のメリットを「大学受験を気にせず、部活やボランティアなど課外活動に打ち込めること」<sup>1</sup>と捉える向きも多く、放課後活動の充実も附属・系属校人気的一端を担っている<sup>2</sup>。駿台予備校／駿台中学生テストセンターも「大学受験のための勉強時間を部活動、学校行事、ボランティア活動にあてて、さまざまな経験を社会に出ることができる」<sup>3</sup>と、その特徴として課外活動への積極的な参加を挙げている。

これらの評価より、高校生および保護者が大学の附属・系属校に入学することで大学受験の不安から開放され、課外活動に気兼ねなく打ち込める環境を期待して附属・系属校を志望している

ことが読み取れる。他方で、学習に関するネガティブな印象もぬぐえない。附属・系属校の生徒は大学への進学が保障されていることから受験への意識が低く、高校入学後の学習についてはおざなりになる傾向にあるという認識が持たれている場合が多い。

言うまでもなく、附属・系属校と一般的な高校との最大の差異の1つは、内部推薦入試による内部進学制度が整備されている点である。大学入試というライフイベントを経ることなく、選抜性の高い系列大学<sup>4</sup>、いわゆる銘柄大学へ進学できることが高校入学時に確実な場合、その生徒たちはどのような高校生活を送るのだろうか。附属・系属校の生徒は、実際に課外活動に積極的に取り組み、学習には消極的なのだろうか。本稿は、附属・系属校生の学習および課外活動に焦点を当て、大学入試に縛られない彼／彼女らがどのような放課後を過ごしているかを明らかにすることで附属校の実態について実証的な分析を試みる。

### 1-2. 附属・系属高校に関する先行研究と分析の枠組み

高大接続改革が示された中央教育審議会の答申(2014)<sup>5</sup>以降、先行き不透明な「大学入試」に対してある種の安心感を求める受験生や家族の間で、内部進学が可能な大学附属・系属校の人氣が高まっている<sup>6</sup>。進学保障は教育を享受する側にとって大きな魅力であると同時に、大学側にとっても早期から優秀な学生を確保できる点、さらに入学生の質を担保することが叶う点で附属・系属校の設置は有用である。土田(2008)は「(従来の)指定校推薦の枠を提供するよりも(高校を)系列化することで、当該高等学校の教育に全面的にコミットし、安定的に優秀な学生を大学に引き入れようということになる」<sup>7</sup>とそのメリットを語っている。

実際のところ、私立大学附属・系属高校からの入試選抜を経ない大学入学、いわゆる「内部進学制度」を利用する大学進学ルートは、日本以外では例を見ない独特の高大接続の形態である<sup>8</sup>。しかしながら、日本に存在する附属・系属高校の数を正確にとらえた体系的な統計はなく、同時に附属・系属校における課外活動に関する研究論文も管見の限り見当たらない<sup>9</sup>。その一方で、受験生およびその保護者に向けた教育雑誌では附属・系属校が積極的に特集されている。大学附属の高校入試に関するガイドブック<sup>10</sup>でリストアップされている首都圏の私立大学附属高校は73校あり、その数は系属校を中心に近年増加の傾向にある<sup>11</sup>とされている。

翻って附属校・系属校での教育カリキュラムは、中央教育審議会による「高大接続答申」<sup>12</sup>内で提唱されている「学力の3要素」(主体性・多様性・協働性／思考力・判断力・表現力／知識・技能)とも親和性が高い。大塚(2020)は「高次の『知識・技能』があればこそ、次なる『主体的学び』に結び付く課題が浮き彫りにされ、より高次の『思考・判断・表現等』の認知活動を通して、さらに高次の『知識・技能』へと結晶化されていく」<sup>13</sup>と述べており、3要素の連環が肝要であると唱えている。須賀中(2008)は、大学の最先端の研究成果を附属・系属校の高校教育段階で享受できることは「学びへのモチベーションアップ」<sup>14</sup>につながると指摘している。

この背景には、暗記による評価を中心とした従来の入試選抜とそれに対応する知識注入型の高校教育への反省と、創造性に代表されるこれからの社会を生きるうえで必要な能力の涵養を重視する文部科学省および大学のアドミッション・ポリシーの変容がうかがえる(中村2012)<sup>15</sup>。そしてこのような評価軸の転換に伴い、座学による従来の学びだけでなく高校時代の留学やスポー

ツ、音楽活動、ボランティア活動など、課外活動への参加経験がポジティブに評価されるような変化が起きている。

このような状況で、大学入試選抜を経ない附属・系属校生は、実際に一般の高校生よりも課外活動に積極的に取り組んでいるのだろうか。また、一般の高校生よりも予備校や塾、通信教育などの学外学習への参加頻度は低いのだろうか。これらの点を明らかにすることで、先行研究の少ない附属・系属校生の実態の一端を捉えることが可能となる。

本稿では、附属・系属校生の放課後の活動実態を、一般の高校生を対象とした過去の先行研究データと比較して論じる。附属・系属校生の特徴を描き出すためには、一般の高校生の放課後の過ごし方に関する分析との対照が不可欠である。そのために、まず2章でベネッセや学研による過去の高校生調査を用いて学外の学習・習い事などの放課後に関する部分を抜粋して分析する。そのうえで、3章以降で附属・系属校生を対象に行ったアンケート調査結果を扱う。3章では附属・系属校生を対象としたアンケート調査のデータ概要を提示し、4章では附属・系属校生の課外活動の参加に関する基礎的な分析を行う。さらに、5章では課外活動への参加と学習時間とのかかわりについて検討し、6章では課外活動への参加および通塾と学習時間の関係について分析する。

論中に使用する語句について、「一般の高校生」とは附属・系属高校以外の公立・私立高校の生徒を指す。「学習塾」「AO対策塾」「英会話」への参加を「学校外での学習活動」とし、「スポーツクラブ」や「音楽教室」などの習い事および「ボランティア活動」への参加など、学習に直結しない学校外の活動について「課外活動」と表記し、学校外での学習活動と課外活動を併せて「学校外での各種活動」と総称する。

## 2. 一般の高校生の放課後

本章では、過去に行われてきた一般の高校生を対象とした放課後の過ごし方に関する調査結果から、学校外での各種活動への参加状況を概観する。具体的には、2015年にベネッセ教育総合研究所が行った「小学生・中学生・高校生の学習に関する意識・実態調査」<sup>16</sup>（以下、ベネッセ調査）、2019年の東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所による共同調査「子どもの生活と学びに関する親子調査2015-2018」<sup>17</sup>（以下、ベネッセ東大共同調査）、および2018年に学研が行った「高校生の日常生活・学習に関する調査」<sup>18</sup>（以下、学研調査）の結果を参照する。

### 2-1. 高校生の平均学習時間

ベネッセ調査では、全国の高校2年生4,426名を対象に、学習塾や家庭教師の時間も含めた平日の自宅での学習時間を尋ねた<sup>19</sup>。その結果、2015年次の平均学習時間は84.4分であった。

同調査は1990年より行われている継続調査である。2015年次の調査では、平日に自宅で学習をしない生徒の割合は14.8%で、その割合が2006年次よりも大幅に減少し、過去最も少ない割合となった。逆に1時間以上学習している生徒の割合は72.8%で、2006年次の60.5%よりも大幅に増加していた。このことから、高校生の自宅学習時間が増加傾向にあることが確認された。

さらに、同調査の高校の偏差値別の結果からは、偏差値が高い高校でより学習時間が長い傾向

が顕著に見られた<sup>20</sup>。偏差値の高い学校に入学している時点である程度の学びの習慣が身につけていると見なすことも可能であり、一概に偏差値と学習時間の関係について比例しているとは言えないものの、いわゆる進学校と呼ばれる高校に通う生徒の家庭学習時間がその他の高校生よりも長い傾向にあることがベネッセ調査より明らかにされた。

### 2-2. 高校生の課外活動への参加

ベネッセ東大共同調査によれば、学校段階別の習い事への参加は、学校段階が上がるにつれ参加比率が低下する結果となった。

2018年次のデータを参照すると、小学校高学年での習い事への参加率が79.8%であるのに対し、中学では39.0%、高校では16.1%と習い事への参加が顕著に減少している。このことから、高校段階では大学入試のための受験勉強が第一となり、学習に直結しない課外活動への参加は学習塾通い（通塾）に比べてハードルが高い一般の高校生像が推察される。

### 2-3. 学研調査に見る高校生の各課外活動事情

一般の高校生の各課外活動への参加傾向を把握するために学研調査を参照し、その参加傾向と男女差について見ていく。

学研が全国の高校生600人を対象に行った学研調査では、先述のベネッセ東大共同調査よりも習い事の内容を細かく尋ねており、また回答者の学年や性別も明らかにされている。「学校以外で行っている習い事はありますか（複数回答可）」という質問に対する回答が下記（図1）である。

選択肢の各種活動の中で最も参加の割合が高い項目が「受験のための塾・学校の補習のための塾」で27.7%、次に「通信教育」12.7%、次いで「英語塾・英会話教室」5.5%で、学習に関連する活動が上位を占める結果となった。これは、前項で示した「学習に直結しない課外活動への参

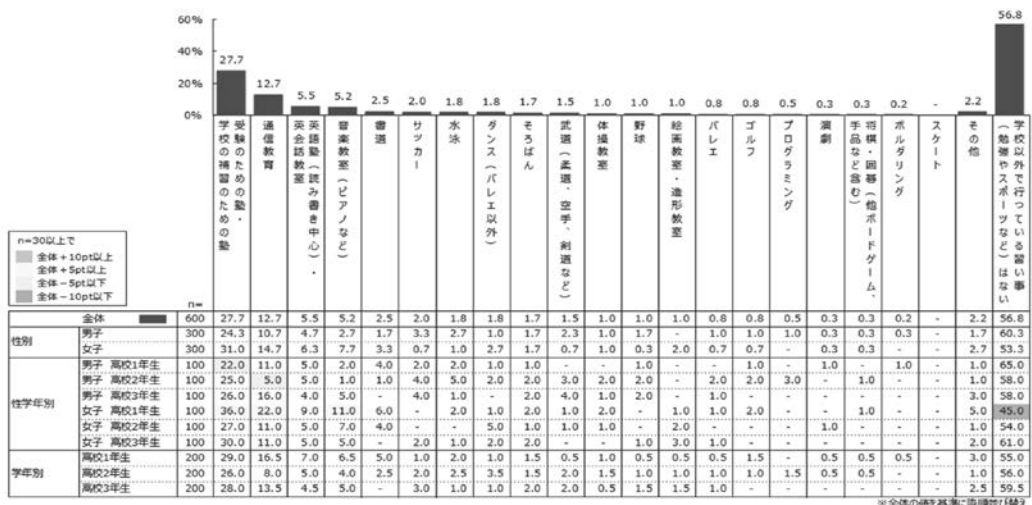


図1 高校生の男女別学年別の学校外での各種活動への参加状況 (%)

出典：学研教育総合研究所「2018年高校生白書Web版 高校生の日常生活・学習に関する調査」8. 習い事について

加は通塾に比べてハードルが高い、一般の高校生像」を補足する結果である。

学研調査によると、一般の高校生のスポーツへの参加率8.3%、音楽教室5.2%、表現活動3.9%であった<sup>21</sup>。学年別で見ると、1年次の参加の割合はスポーツ7%、音楽教室6.5%、表現活動2.5%、2年次はスポーツ10%、音楽教室4%、表現活動6%であり、3年次はスポーツ8%、音楽教室5%、表現活動3.5%と、音楽教室を除いて3年次の方が2年次よりも参加率が低下している。スポーツと表現活動は1年次よりも2年次の方が高く、3年次で減少していた。他方で音楽教室は1年次が最も高く2年次で減少し、3年次には微増していた。このように活動ごとに傾向が異なるため一概には言えないものの、一般の高校生は3年次には習い事を控える傾向がある可能性が確認された。

次に、図1をもとに一般の高校生の男女別の習い事の傾向を見てみる。「スポーツ」では男子の参加12.3%、女子4.4%であり、男子の方が積極的にスポーツを行っていることがわかる。また、「音楽教室」では男子2.7%、女子7.7%と女子の方が音楽教室に通っており、「表現活動」についても同様に、男子2.3%、女子5.7%と女子の方が積極的に参加している傾向が見られた。「音楽教室」と「表現活動」はいずれも文化的な要素を含む活動という点で共通しており、男子の課外活動にはスポーツが選ばれる傾向が高く、女子の課外活動には文化的活動が選ばれる傾向が高い結果が示された。つまり、性別によって課外活動のすみ分けがなされていると言える。

また学研調査には「ボランティア活動への参加」の有無を尋ねた項目が設置されており<sup>22</sup>、その結果を見ると、ボランティア活動に参加する高校生の割合は16.5%、男女別に見ると男子19.7%、女子13.3%と、男子の方が女子よりもボランティア活動に積極的な傾向が確認された<sup>23</sup>。

そのほか、ミュージアム訪問について一般の高校生を対象としたデータでは、2015年にベネッセが高校3年生を対象に行った調査<sup>24</sup>において、訪問経験ありの生徒の割合は27.5%であった<sup>25</sup>。

以上、一般の高校生の課外活動の傾向を確認してきた。ベネッセ調査からは、進学校の生徒の家庭学習時間が他の高校生よりも長い傾向にあることがわかった。また、ベネッセ東大共同調査より、高校段階で課外活動への参加が中学段階に比べて半減することが確認された。学研調査では、学習活動も含めた各種習い事の中で最も参加割合が高かったのが「受験のための塾・学校の補習のための塾」であった。これらの結果より、一般の高校生にとって学習に直結しない課外活動への参加は、通塾に比べてハードルが高い傾向が見られた。また、課外活動について、男子の習い事はスポーツが選ばれる傾向があり、女子の習い事は文化的活動が選ばれる傾向がある、すなわち性別によって課外活動のすみ分けがなされている可能性が示唆された。また、ボランティア活動への参加については、男子の方が女子よりも積極的な傾向が見られた。

一般の高校生にとって、課外活動への参加が通塾に比べて消極的な背景には、課外活動への参加が受験勉強を阻害する、という認識があるように推察される。

### 3. 附属・系属校生を対象とした調査概要

前章では過去の調査結果をもとに一般の高校生の学外学習や課外活動への参加傾向を分析した。ここからは、附属・系属校生を対象に行ったアンケート調査結果（本調査）をもとに、より詳細に生徒たちの放課後活動を分析する。そのために、本章ではまず分析対象となる本調査の

データ概要を提示する。

本調査は、首都圏にある私立X大学の複数の附属・系属高校を対象として行った。多くの私立大学が附属・系属校を設置する現状で、系列大学の選抜性が低い附属・系属高校の場合には推薦制度により系列大学に進学する者は少ないと考えられる<sup>26</sup>。そこで本稿では、大学附属・系属校の特徴である内部進学制度が積極的に利用されている高校、すなわち私立大学の中でも選抜性の高い私立X大学の附属・系属校を対象とした。

調査実施にあたって、調査実施主体『グローバル時代における高大接続に関する研究』共同研究チームが各高校の教員に調査協力の依頼を行い、最終的に調査への協力が得られた学校は6校であった。対象の6校はそれぞれ所在地（3校のみ関東地域）、共有有無（6校のうち5校が共学で男子校が1校）などの違いがあるものの、共通する特徴として、6校すべてが受験偏差値上位のいわゆる「進学校」であること、そして、年間の学費が100万円ほどであることから、家庭の社会経済的背景（SES）が高いことが予想されることが挙げられる。

質問紙調査は、共同研究チームが調査票を各校に送付し、教員がホームルーム等で生徒に任意回答を求める形で実施された。調査時期は2019年9月から10月であり、調査内容は、当該校への進学理由、大学進学方法の希望（附属・系属校推薦、一般入試など）、授業以外の学習時間数、大学進学に関する意識（進学のために努力する必要があるか）、学習への意欲、学校外での課外活動などが設定された。最終的に、4,081人の生徒から回答が得られた。悉皆調査が行われた5校の在学生徒数は4,122人（2019年度）で、調査表配布数4,122票、回収数3,932票、有効回答率は95.4%である。標本調査が行われた1校の回収票は149票と2019年度在校生の1割ほどであった。

本稿では、そのうち有効回答票3,998人分のデータを分析対象とする。

なお、6校の附属・系属校のうち3校は内部推薦で系列大学にほぼ全入する学校、残りの3校は系列大学への内部推薦者が校内選抜される高校と、系列大学への進学保障について差はあるものの、本研究では大学の附属・系属校に通う生徒の学校外での各種活動への参加傾向を広く捉えることを目的とするため、これらを分けずに分析する。

#### 4. 附属高校生の学校外での各種活動

本章では、附属校に通う生徒を対象にした本調査の「学校外での各種活動」の回答結果を提示する。具体的には、①附属・系属校生の学校外での学習活動（通塾）への参加状況、②附属・系属校生の課外活動への参加状況、③附属・系属校生の男女別の課外活動への参加傾向を見ていく。

##### 4-1. 学校外での学習活動への参加

先述のとおり、学研調査で「習い事」の中でも特に参加の割合が高かったのは「受験のための塾・学校の補習のための塾」27.7%、「通信教育」12.7%、「英会話」5.5%で、一般の高校生は学習に関する活動に積極的であることが示された。

翻って、附属・系属校の生徒の学校外での学習活動への参加状況を見てみる。表1は「学習塾」「AO入試対策の学習塾（AO対策塾）」「英会話教室」の各学習活動への参加の割合を4件法で尋ねた結果である。

表1 学校外での各種学習活動への参加 (%)

	ほとんど しない	年1回～ 月2回程度	週1回程度	週2回以上	合計 (n)
学習塾	65.8	3.7	14.5	16.0	100.0 (4,043)
AO対策塾	97.4	0.9	1.0	0.7	100.0 (3,972)
英会話教室	88.6	3.4	6.4	1.7	100.0 (3,986)

3つの活動の中では「学習塾」への参加の割合が最も高く、「年に1回～月に2回程度（月に2回程度）」「週1回程度」「週に2回以上」を併せて「通っている」と見なすと、学習塾へ通っている附属・系属校生の割合は34.2%であった。その次に英会話教室が11.4%、最も割合が低かったのは「AO対策塾」の2.6%であった。これは、附属・系属校から大学への接続が一般の高校に比べて特殊である事情を反映しており、附属・系属校では多くの生徒が「推薦」という形で大学進学するため、AO対策について考慮する必要性が弱まる背景を反映した結果であると推察される。

また、頻度について、最も高頻度で通っているのは「学習塾」であり、学習塾に週1回以上通う割合は30.5%であった。その次に「英会話」8.1%、「AO対策塾」1.7%で、附属・系属校生の学校外での学習活動については、学習塾への参加頻度が群を抜いて高いことがわかった。

以上より、附属・系属校の生徒も低くない割合で学校外学習に取り組んでいることが明らかになった。また、学習塾に通っている男女比を確認したところ、男子の32.8%、女子の35.8%の割合であり性別による差が大きくなり、有意差も見られなかった<sup>27</sup>。これらの結果から、性別に関わらず附属・系属校生が通塾している実態が明らかになった。

#### 4-2. 課外活動への参加

課外活動への参加について、放課後の「スポーツクラブ」「学外ボランティア活動」「音楽活動」「ミュージアム訪問」「美術製作やダンスなどの表現活動」「お祭りなどの地域行事」への参加状況を尋ねたところ、表2のような結果となった<sup>28</sup>。なお調査票では、各課外活動について「全くしない」「年に1回程度」「半年に1回～月に1回程度」「2週間に1回以上」の4件法で尋ねた。

参加頻度について「スポーツクラブ」「音楽教室」「表現活動」は高頻度（2週間に1回以上）で取り組んでいる生徒が多いのに対し、「学外ボランティア活動」「ミュージアム訪問」「地域行事」は低頻度（年に1回程度）で参加している生徒が多い傾向が明らかになった。これは、前者の活動が継続的に行う「習い事」の性格が強いのに対し、後者は単発的に取り組む「イベント」としての性格が強いためではないかと推測される。

以上の結果より、課外活動の内容によって生徒の参加頻度が大きく異なることがわかった。

なお、本調査では附属・系属校生がどの程度課外活動を行っているのかを明らかにするために活動別に参加頻度を尋ねているが、前出のベネッセ東大共同調査では活動の内容を問わず「習い事」として一括りに取り扱い、その有無をカウントしていた。また学研調査においても、各種習

い事を参加有無によりカウントしており、頻度を尋ねている高校生調査は管見の限りでない。本稿でも、それらとの比較を目的として「課外活動の有無」の項目を設定した。

いずれかの課外活動に参加している生徒の割合は67.2%であり、前出のベネッセ東大共同調査の割合(16.1%)<sup>29</sup>と比べ積極的に学外で活動している様子が明らかになった。翻って、6種いずれの課外活動にも不参加の群が32.8%の割合で存在した。

表2 各課外活動への参加 (%)

	全くしない	年1回程度	月1回程度	2週間に1回	合計 (n)
スポーツクラブ	79.9	3.0	4.8	12.4	100.0 (4,041)
ボランティア活動	80.7	14.1	4.2	1.0	100.0 (4,029)
音楽教室	89.2	2.3	2.9	5.7	100.0 (4,020)
ミュージアム訪問	67.0	20.2	11.9	0.9	100.0 (4,024)
表現活動	86.3	5.4	3.9	4.3	100.0 (4,028)
地域行事	54.4	28.9	15.4	1.3	100.0 (4,044)
課外活動の有無*	32.8		67.2		100.0 (3,980)

※「課外活動の有無」については、6つの課外活動のいずれにも不参加の群と、1つ以上参加している群の割合

先行研究と比較するために、各課外活動への参加有無について「全くしない」を「不参加」、「年に1回程度」「半年に1回～月に1回程度」「2週間に1回以上」を「参加」としてカウントした場合のそれぞれの活動への参加を見てみると、「地域行事」が最も高く45.6%と約半数が参加していた。次いで「ミュージアム訪問」(33.0%)、「スポーツクラブ」(20.1%)、「ボランティア活動」(19.3%)、「表現活動」(13.7%)と続き、最も参加率が低かった項目は各種楽器や合唱団への参加を含む「音楽教室」(10.8%)であった。ただし、一般の高校生の「音楽教室」(5.2%)<sup>30</sup>に比べると、6項目中で最低の「音楽教室」の結果も十分に高い値であると言える。

同様に上記の結果を一般の高校生(2-3)と比較すると、いずれの活動においても附属・系属校生の方が参加している割合が高い傾向が示された。

#### 4-3. 男女別の各課外活動への参加

本節では各課外活動への男女別の参加傾向について見ていく。図2は各課外活動への参加について、4-2の参加有無と同様の基準<sup>31</sup>で「参加」と回答した男女別の割合である。 $\chi^2$ 検定の結果、ボランティアを除く全ての活動で $p < .001$ で統計的に有意であった<sup>32</sup>。

全体の傾向を見ると、本調査では「スポーツクラブ」は男子、その他の「音楽教室」「ミュージアム訪問」「表現活動」「地域行事」などの文化的な活動<sup>33</sup>については女子の方が積極的である傾向が確認された。

唯一有意差が出なかった「ボランティア活動」については、男女ともほぼ同等の参加率であり、2-3の学研調査で示された一般の高校生の傾向(男子の方がボランティア活動に積極的)が、附属校の生徒においては必ずしも当てはまらない可能性が示唆された。



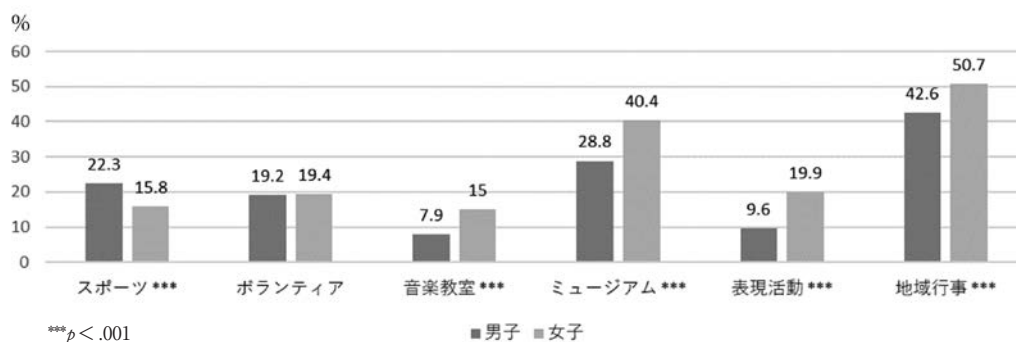


図2 男女別の課外活動への参加

以上の結果から、学研調査と同様に附属・系属校生についても男子がスポーツクラブ、女子が音楽教室をはじめとする文化的活動に参加する傾向が高いことが明らかになった。これは、附属校においても「課外活動に対する男女差」が存在していることを示唆している。ただし、スポーツクラブの男女差について、学研調査では男子12.3%、女子4.4%と男子の方が3倍近くスポーツクラブへの参加率が高かったのに対し、本調査では男子22.3%、女子15.8%とその差が縮小される傾向が確認された。同様に音楽教室についても、学研調査では男子2.7%、女子7.7%と女子の方が3倍近い参加率であったのに対し、本調査では男子7.9%、女子15%とその差は約2倍にとどまった。これらの結果から、附属校においても課外活動における男女差は存在するものの、男子が音楽教室、女子がスポーツクラブに参加する場合も少なくなく、一般の高校よりも男女差が縮まる傾向が示唆された。

ここまで、附属・系属校生の課外活動への参加について、一般の高校生のデータと単純集計結果を対照しながら分析してきた。では、課外活動に参加している生徒とそうでない生徒では、学校外での学習時間に差があるのだろうか。次章では、表2で用いた基準<sup>34</sup>を採用し、附属・系属校内部の分析、すなわち附属・系属校生の課外活動への参加と不参加の各群と学習時間との関係を見ていく。

## 5. 課外活動への参加と学習時間

本章では、はじめに附属・系属校生の平日および週末の平均学習時間を提示し、次に課外活動への参加と学習時間の関係を検証する。これまで、ベネッセ調査や学研調査のように、高校生の課外活動への参加有無と学習時間を単独で調査した先行研究はあるものの、課外活動への参加と学習時間との関係を考察した先行研究は管見の限りない。本章では、課外活動への参加有無による学習時間の差について言及することで、附属・系属校生の課外活動への参加と学習時間の関係について検討する。

### 5-1. 平均学習時間

まず附属・系属校生の平日と週末の学習時間を表3に提示する。本調査では、学習塾や予備校を含む平日および週末の学習時間を7件法<sup>35</sup>で尋ねた。なお、平日の平均学習時間は1.57時間 ( $SD=1.281$ )、週末の平均学習時間は2.06時間 ( $SD=1.689$ ) であった。

表3 平日と週末の学習時間 (%)

	0時間	1時間	2時間	3時間	4時間	5時間	6時間以上	合計 (n)
平日	19.9	35.4	23.7	14.0	4.0	1.6	1.5	100.0 (4,050)
週末	18.5	26.5	20.9	15.4	8.3	4.4	6.0	100.0 (4,026)

平日・週末ともに最も多い回答は、「1時間」で、次いで「2時間」が多かった。また、平日を見ると3時間以上学習している割合が21.1%いる一方で、0時間と回答した割合も19.9%と、約5人に1人が学習時間0時間であることがわかった。

さらに平日の平均学習時間を見ると、2-1のベネッセ調査では全体の平均学習時間は84.4分で、本調査の94.2分(1.57時間)の方がやや長い結果となった。ただし、高校の偏差値ごとの平均学習時間では、偏差値55以上の高校の生徒の平均学習時間が111.9分であった。今回の調査対象校6校がいずれも偏差値65以上であったことを踏まえると、附属・系属校生の学習時間は一般の高校生よりはやや長いものの、同程度の偏差値の高校生に比べると短いことが明らかになった。

## 5-2. 課外活動への参加と学習時間

本節では、附属・系属校生を各課外活動別に参加群と不参加群に分け、それぞれの平均学習時間を見ていく。

各活動について「全くしていない」と回答した不参加群と、「年に1回程度」「半年に1回～月に1回程度」「2週間に1回以上」のいずれかに回答した参加群に分け、活動ごとに双方の群の平日の学習時間<sup>36</sup>(学習塾や家庭教師の時間含む)の平均値をグラフで表した(図3)<sup>37</sup>。

図3から、全ての課外活動において参加群の方が不参加群よりも学習時間が長いことが確認された。活動の種類にかかわらず、課外活動を行っている生徒の方が学習時間が長い傾向にあり、このことから附属・系属校生に関しては、課外活動は学習を妨げない可能性が示唆された。

また、いずれの課外活動にも全く参加していない「活動なし」群と1つ以上の課外活動に参加している「活動あり」群で平日の学習時間の平均値を比較したところ、課外活動なし群が1.46時間( $SD=1.317$ ,  $N=1,295$ )であったのに対し、あり群は1.63時間( $SD=1.261$ ,  $N=2,658$ )と、

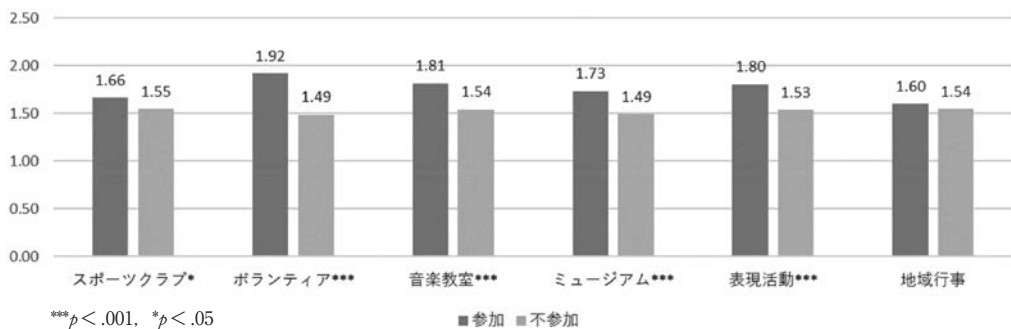


図3 課外活動への参加×平日学習時間の平均(時間)

課外活動を行っている生徒の方が学習時間が長い結果となった<sup>38</sup>。さらに、週末の学習時間では、課外活動なし群で1.83時間 ( $SD=1.702$ ,  $N=1,289$ )、あり群で2.17時間 ( $SD=1.674$ ,  $N=2,640$ )と、同様の傾向が確認された<sup>39</sup>。

以上の結果から、附属・系属校生に関しては、課外活動への参加は学習時間を短縮させず、むしろ課外活動に取り組む生徒の方が学習にも積極的である傾向が確認された。ただし、これは「附属・系属校生は、勉強にも課外活動にも積極的である」という全体の傾向を示すものではない。

図4は、平日の学習時間の有無（0時間か1時間以上か）と課外活動への参加有無をクロス表でかけ合わせ、その結果より平日の放課後に学習を全くしない（0時間）群を抜粋し、各課外活動の参加有無別に表したものである。 $\chi^2$ 検定を行った結果、スポーツクラブのみ $p<.05$ 、表現活動と地域行事が $p<.01$ 、ボランティア活動と音楽教室とミュージアム訪問が $p<.001$ で統計的に有意であった<sup>40</sup>。

図4より、全ての課外活動において、不参加群の方が参加群よりも平日の学習時間が0時間である割合が高いことが確認された。このことから、課外活動に参加していない生徒の方が学習時間0時間の割合が高い、すなわち課外活動に消極的である群が学習にも積極的ではない傾向にあるという結果が得られた。

以上の分析から、附属・系属校生においては、課外活動への参加が学習時間を短縮させているとは言えず、むしろ課外活動にも学習にも意欲的に取り組む群と、放課後の活動のいずれに対しても消極的な群の両群が存在する可能性が示された。

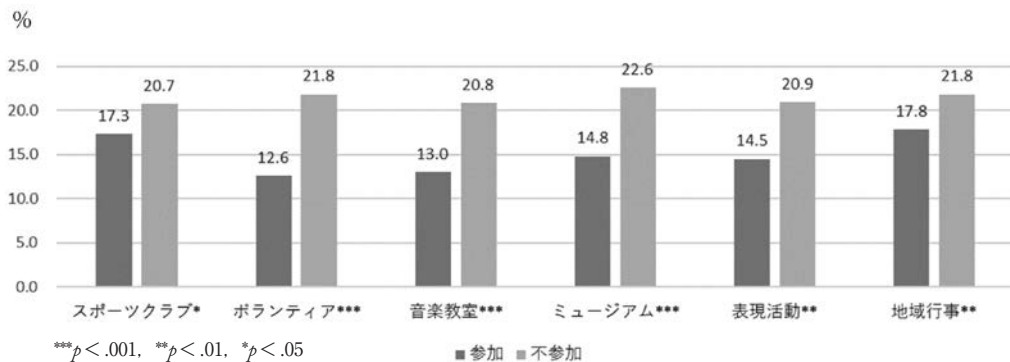


図4 課外活動への参加有無×平日の学習時間0時間の割合

## 6. 通塾と課外活動への参加

前章では、附属・系属校生の課外活動への参加と学習時間の関係について分析し、課外活動への参加が学習に対してネガティブに働かないことがわかった。では、新たに通塾の有無という指標を加えた場合に、同様の結果が得られるであろうか。つまり、塾に通っていることで必然的に学習時間が伸びている生徒が、他の課外活動にも積極的に参加しているのか。

本章では、まず通塾している生徒とそうでない生徒の各課外活動への参加有無を確認する。さらに、複数の課外活動をかけ持ちしている生徒の割合について、通塾している生徒とそうでない

生徒の群に分けて分析する。終わりに、附属・系属校生を通塾と課外活動への参加有無の観点から4つの群に分け、それぞれの平均学習時間を確認し、5章で検討した課外活動と学習時間の関係についてより詳細な考察を試みる。

6-1. 通塾の有無と課外活動への参加

通塾と課外活動への参加の関係を検証するために、通塾有無と6種の各課外活動および表2の「課外活動有無」をクロス表でかけ合わせた(表4)。 $\chi^2$ 検定を行ったところ、地域行事のみ  $p < .05$ 、その他の5つの課外活動は  $p < .001$  で有意であった<sup>41</sup>。

表4 通塾×課外活動への参加 (%)

	スポーツクラブ***		ボランティア***		音楽教室***		ミュージアム***		表現活動***		地域行事*		学外活動有無***	
	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし
通塾なし	17.7	82.3	16.0	84.0	8.9	91.1	39.5	69.5	11.9	88.1	44.2	55.8	64.6	35.4
通塾あり	24.9	75.1	25.7	74.3	14.6	85.4	37.4	62.6	17.1	82.9	48.1	51.9	72.2	27.8

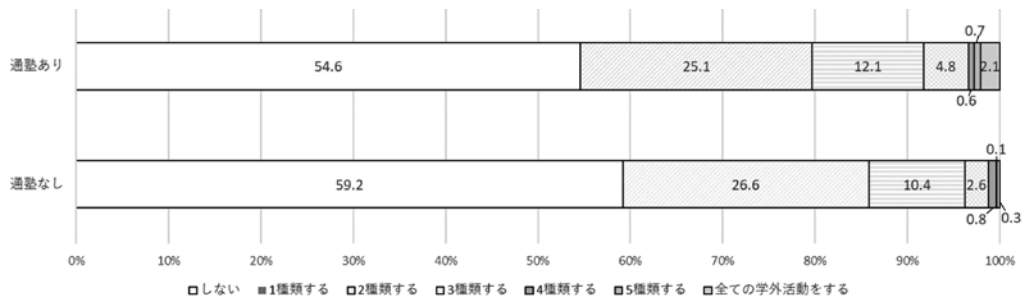
\*\*\* $p < .001$ , \* $p < .05$

表4から、「ミュージアム」を除くいずれの課外活動でも、通塾している群の方が積極的に取り組んでいることが明らかになった。ミュージアム訪問については、通塾あり群となし群で同程度だった。

また、「月1回以上」の高頻度で通う生徒の割合が高かった「スポーツクラブ」においても、通塾なし群よりも通塾あり群の方が参加割合が高かったことから、学習活動にも課外活動にも積極的な群といずれにも消極的な群がいる、という5章での分析内容を裏付ける結果となった。

では、通塾している生徒はどの程度課外活動に積極的なのであろうか。ここからは、通塾と参加する課外活動の数について確認する。

通塾有無と参加している課外活動の数をかけ合わせたところ、図5のような結果となった。



$\chi^2 = 62.294$ ,  $df = 6$ ,  $p < .001$

図5 通塾×課外活動のかけ持ち

図5から、通塾をしている生徒の方が、課外活動を2つ以上かけ持ちしている割合が高いことが明らかになった。2種類以上の課外活動をかけ持ちする生徒の割合を比較すると、通塾なし群は14.2%、通塾あり群は20.3%であり、通塾にも課外活動にも積極的に取り組む群が確認された。つまり、附属・系属校生内に学校外での学習（通塾）と余暇の充実（複数の課外活動への参加）の両立を図っている群がいることがわかった。

## 6-2. 学校外での各種活動（通塾および課外活動）への参加と学習時間

上記より、学習にも課外活動にも積極的な生徒がいることは確認できたが、通塾の有無と課外活動への参加有無は、生徒の学習時間にどう反映されているのだろうか。

その点を明らかにするために、本節では附属・系属校生を「通塾なし×課外活動あり」（課外活動のみ群）、「通塾なし×課外活動なし」（無活動群）、「通塾あり×課外活動あり」（両立群）、「通塾あり×課外活動なし」（通塾のみ群）の4群に分け<sup>42</sup>、それぞれの平均学習時間を比較する。4つの群の平日の平均学習時間（図6）と週末の平均学習時間（図7）を、下記のとおり示した。

4つの群の比較をする前に、図6と図7の前提となっている「通塾あり」群と「通塾なし」群の学習時間の平均について言及しておく。通塾あり群となし群の学習時間を比較したところ、平日の平均学習時間は通塾あり群で2.10時間、なし群で1.30時間、週末の平均学習時間は通塾あり群で2.62時間、なし群で1.76時間と、いずれも通塾している生徒の方が学習時間が長く、統計的に有意であった<sup>43</sup>。

平日の平均学習時間を4つの群で比較したところ、通塾も課外活動もしていない無活動群で1.2時間<sup>44</sup>、課外活動のみ群で1.36時間<sup>45</sup>、通塾のみ群で2.12時間<sup>46</sup>、両立群で2.09時間<sup>47</sup>となった（図6）。各群の平日の平均学習時間の差異を確認するために分散分析を行ったところ、有意な差が示された（ $p < .001$ ）<sup>48</sup>。

図6から、通塾なしの「課外活動のみ」群と「無活動」群との比較では、課外活動のみ群で学習時間が0.16時間長い結果となり、統計的にも有意であった（ $p < .01$ ）。つまり、学習塾に通っていない生徒については、課外活動に参加している生徒の方が全く参加していない生徒よりも平日の学習時間が長い傾向が確認された。一方で通塾ありの群においては、課外活動に参加していない「通塾のみ」群の方が通塾も課外活動もする「両立群」よりもわずかに（0.03時間）学習時間が長かったものの、有意差は見られなかった。このことから、学習塾に通っている生徒につい

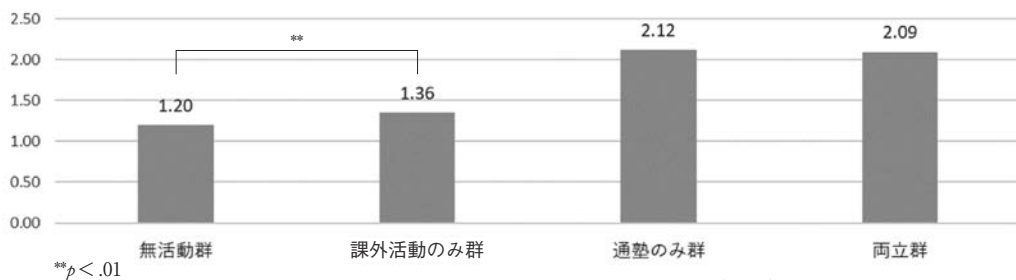


図6 通塾×課外活動別 平日の平均学習時間（時間）

ては課外活動の有無が平日の学習時間と関係がない可能性が示唆された。

さらに、週末の学習時間についても同様に4つの群の平均学習時間を出した(図7)。その結果、無活動群で1.53時間<sup>49</sup>、課外活動のみ群で1.89時間<sup>50</sup>、通塾のみ群で2.58時間<sup>51</sup>、両立群で2.64時間<sup>52</sup>となった。各群の週末の平均学習時間の差異を確認するために分散分析を行ったところ、有意な差が示された( $p < .001$ )<sup>53</sup>。

図7より、通塾なしの「課外活動のみ」群と「無活動」群との比較では、課外活動を行う生徒の方が週末の学習時間が0.36時間長い結果となった。これは統計的にも有意であり( $p < .001$ )、通塾していない生徒については、課外活動を行っている方が週末によく学習していることがわかった。

一方通塾ありの群では、「両立」群の方が「通塾のみ」群よりもわずかに(0.06時間)学習時間が長かったものの、図6と同様に有意差は見られなかったため、通塾群においては課外活動の有無は週末の学習時間にも関係がない可能性が示唆された。

以上の結果より、週末の学習時間に関しても平日の学習時間と同様の結果が得られた。すなわち、週末においても課外活動が学習を妨げないことが明らかになった。

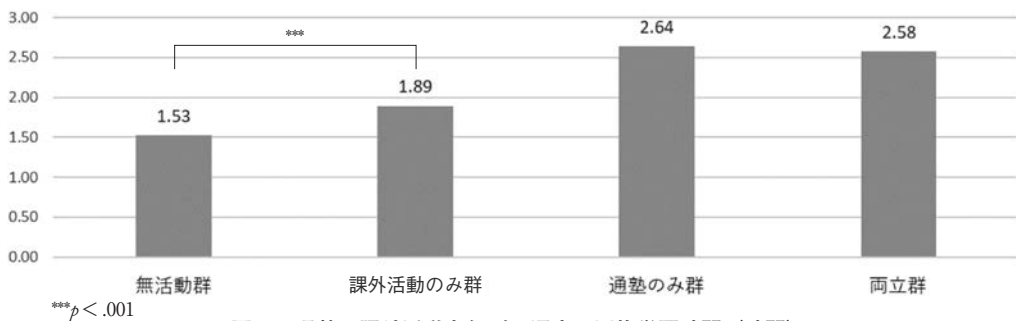


図7 通塾×課外活動有無別 週末の平均学習時間 (時間)

## 7. 考察と今後の展開

本稿では、附属・系属校生の学校外での学習活動と課外活動への参加傾向について、一般の高校生および附属・系属校生内部の比較によって分析した。

一般の高校生の過去の調査結果との対照について、学校外での学習活動については附属・系属校生の通塾割合が34.2%であり、ベネッセ東大共同調査の27.7%と比べ決して低くない結果となった。これは、附属・系属校生は大学への進学が保障されているために高校入学後に勉強をしなくなる、という一般論への反証になり得る。ただし、4章で言及したとおり、附属・系属校生の平日の平均学習時間は一般の高校生全体の平均値よりは長いものの、ベネッセ調査における進学校(高偏差値)の高校生と比べると短い結果であった。

このような結果となった解釈として、本調査の対象である附属・系属校の偏差値が高いため、高校入学時にある程度学びの習慣を身に着けた生徒が選抜されており、その結果大学受験のプレッシャーが弱い附属・系属校でも一定の学習時間が確保されている、と捉えることができる。この点についてより詳細な検討を行うためには、選抜性の低い附属・系属校を対象とした追加調

査の必要があり、今後の課題としたい。

課外活動への参加については、一般の高校生よりも、附属・系属校の方が積極的に参加する傾向が示された。附属・系属校生は、地域行事には約半数の生徒が参加しており、ミュージアムには3人に1人の割合で訪れていた。また、スポーツクラブ、音楽教室については高頻度で通う生徒が多い一方で、ボランティア活動、ミュージアム訪問、地域行事については低頻度で参加する生徒が大多数であり、課外活動の内容によって生徒の放課後の時間を占める割合が異なることがわかった。さらに、いずれかの課外活動に1度でも参加している群（課外活動あり群）とそうでない群（課外活動なし群）の割合を比較したところ、活動ありが67.2%と過半数であった。

また、学研調査において男女差が示された各課外活動への参加については、附属・系属校においても同様に男子がスポーツクラブ、女子が音楽教室をはじめとする文化的活動に参加する傾向が高い結果となった。ただし、スポーツクラブに参加している男女の割合について、学研調査では男子12.3%、女子4.4%と男子の方が3倍近く高かったのに対し、本調査では男子22.3%、女子15.8%であるなど、附属・系属校では男女差が縮小される傾向が示唆された。同様の指摘は音楽教室についても当てはまり、「課外活動の種類によって男女差は確認されたものの、その差は一般の高校生と比べると縮まる傾向にある」という点が附属校の特徴として提示された。このように、性別による課外活動のすみ分けが弱いことから、附属・系属校生が自由に課外活動に取り組んでいる実態が示された。

次に、附属・系属校生内で行った比較の結果を検討する。課外活動への参加と学習時間の関連については、課外活動の種類に関わらず活動に参加する生徒の方が、学習時間が長い傾向が確認された。ただし、学習にも課外活動にも積極的な群がある一方で、反対にいずれにも消極的な群も存在しており、附属・系属校生の課外活動と学習へ取り組む姿勢は、相反しない傾向にあるものの必ずしも両立するものではなく、生徒個人の性質に因るところが大きいという示唆が得られた。

また、通塾と課外活動への参加有無の関係について、附属・系属校生は通塾している生徒の方が課外活動を複数掛け持ちしている割合が高く、学習を犠牲にしているわけではない点が明らかになった。さらに、課外活動に参加している生徒の方がそうでない生徒よりも学習時間が長い傾向あり、課外活動への取り組みと意欲的な学習に関連があることが示唆された。課外活動を行うために生徒の学習時間が長いのか、あるいは学習時間が長い生徒が積極的に課外活動を行うのか、その因果関係は定かではないが、学習塾に通わない生徒に関しては、課外活動への参加が放課後の学習にプラスにはたらくていることがわかった。

以上の結果を総括すると、1-1で述べた「附属・系属校の生徒は大学への進学が保障されている分、受験のプレッシャーが一般の高校生より弱いため、課外活動に積極的で、なおかつ高校入学後の学習についてはおどろきになりがちである」という一般的な認識に対して、本調査で得られた結果からは、附属・系属校内で内部分化が起きている実態が示された。

附属・系属校生の中には学習にも課外活動にも積極的な生徒が存在し、課外活動に取り組む生徒の方が不参加の生徒よりも学習時間が長い傾向が見られるなど、放課後の課外活動に取り組むにつれ学習もないがしろにしない生徒像が浮かび上がった。一方で、課外活動にも学習にも消極

的な生徒群が存在し、附属・系属校生の中で内部分化が起きていた。その内部分化を引き起こす要因については、今後の附属・系属校研究の課題としたい。

最後に、本稿の限界について記載する。本調査の対象である附属・系属校は選抜性が極めて高く、生徒たちは高校入学時に厳しい選抜を経ている。それゆえに、ある程度学びの習慣が身につけており、その自律性から課外活動が学習を妨げる要因にならない、という特徴が顕在化している可能性は否めない。「課外活動への参加が学習時間を減らさない」という結果をより詳細に考察するためには、今後公立高校を含めた追加調査が必要となる。さらに、私立高校の中でもごく一部の附属・系属校の特徴を論じるためには、そのほかの私立高校との比較も求められるだろう。本稿で得られた知見を深めるためには、偏差値、学校の設置主体、地域性などを鑑みた「一般の高校生」を対象とした調査結果を踏まえて一般化する必要がある。

本調査で得られた結果が附属・系属校生ならではの特徴であるのか、あるいは偏差値がある程度高い高校生全体の特徴なのか、その点は追加調査で明らかにしたい課題である。他方で「高校生の課外活動と学習時間の関係」を明らかにするための試金石として、選抜性の高い附属・系属校の複層的な結果を提示した点に本稿の意義を見出したい。

#### 付記：

本稿は、早稲田大学教育総合研究所研究部会「グローバル時代における高大接続に関する研究：大学附属校・系属校を対象として（代表：吉田文）」（2019年度：B-11、2020年度：B-3）、および「私立大学附属高校が大学進学者にもたらす影響に関する研究—高大連携教育と内部進学制度に着目して—（代表：吉田文）」（2021年度：B-10、2022年度：B-5）の研究成果の一部である。

#### 注

（以下Webサイトの最終閲覧日は2022年9月22日）

- 1 ベネッセ教育情報サイト「高校からの『大学附属校』志望者が増えている理由」（2018/05/25）  
<https://benesse.jp/juken/201805/20180525-1.html>
- 2 「高三になっても部活や行事や趣味と学業を両立しながら、進路についてじっくり考える時間もある」おおたとしまさ『大学付属校という選択』、日本経済新聞出版社、2016、p.19.
- 3 駿台予備校／駿台中学生テストセンター「大学附属・系列高校の魅力」、晶文社学校案内編集部『首都圏私立高校大学附属校ガイド 2020年度用』、晶文社、2019、p.6.
- 4 本稿では、附属・系属高校との連携関係がある特定の大学を系列大学とする。
- 5 中央教育審議会『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について—すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために—（答申）』、2014.
- 6 安田賢治「付属校の『内部進学力』」『東洋経済』10/30号、2021、pp.80-81.
- 7 土田健次郎「中高系列化の意味と課題」『大学時報』No.323、2008、p.40.
- 8 吉田文「大学と高校の接続の動向と課題」『高等教育研究』第14集、2011、pp.169-181.
- 9 附属校・系属校生の学習に関する先行研究としては沈雨香・武藤浩子の「私立大学附属・系属高校生徒の学習に関する研究—大学進学ルートの違いに着目して—」（『早稲田教育評論』第36巻第1号、2022、pp.71-86）がある。



- 10 晶文社学校案内編集部『首都圏 私立高校 大学附属校ガイド 2020年度用』, 晶文社, 2019参照.
- 11 土田, 2008, pp.40-43.
- 12 注5に同じ。
- 13 大塚雄作「どう変わる高校教育・どう変える大学教育—高大接続改革における大学教育のあり方を問う—」『大学教育学会誌』第41巻第2号, 2020, p.7 (pp.6-9).
- 14 須賀中清志「大学を取り巻く環境と中高系列化を考える」『大学時報』No.323, 2008, p.33.
- 15 中村高康「大学入学者選抜制度改革と社会の変容不安の時代における「転機到来」説・再考」『教育学研究』第79巻第2号, 2012, pp.53-62.
- 16 ベネッセ教育総合研究所「第5回学習基本調査 データブック [2015]」(2016/1月発行).  
[https://berd.benesse.jp/up\\_images/research/5kihonchousa\\_datebook2015\\_all.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/research/5kihonchousa_datebook2015_all.pdf)
- 17 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所共同調査「子どもの生活と学びに関する親子調査2015-2018」ダイジェスト版 (2019/3月発行).  
[https://berd.benesse.jp/up\\_images/research/oyako\\_tyosa\\_2015\\_2018\\_Web%E7%94%A80225.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/research/oyako_tyosa_2015_2018_Web%E7%94%A80225.pdf)
- 18 学研教育総合研究所「2018年高校生白書Web版 高校生の日常生活・学習に関する調査」(2018年調査) <https://www.gakken.co.jp/kyouikusuken/whitepaper/h201809/index.html>. なお、同調査の最新データは2021年8月調査版であるが、2020年からの新型コロナウイルスによるパンデミックの影響下にあり本論では2018年のデータを採用した。
- 19 「あなたはふだん(月曜日～金曜日)、学校での授業以外に1日にだいたい何時間くらい勉強していますか。学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間も含めてください。」という設問文で尋ねた。
- 20 偏差値55以上の高校の平均学習時間が111.9分であったのに対し、偏差値50以上55未満の高校で84.5分、偏差値45以上50未満の高校で65.5分、偏差値45未満の高校で44.6分であった。
- 21 3章以降の本調査では「スポーツクラブ」としてスポーツの内容を問わず参加有無を尋ねているものの、学研調査では細かく種目別に訪ねている。そこで、一般の高校生の傾向を把握するために本調査の項目を参照し、学研調査上の「サッカー」「水泳」「武道」「体操教室」「野球」「ゴルフ」「ボウリング」を併せて「スポーツ」とし、同様に図1の「ダンス」「絵画教室・造形教室」「バレエ」「演劇」を併せて「表現活動」として総称する。
- 22 学研教育総合研究所「2018年高校生白書Web版 高校生の日常生活・学習に関する調査」(2018年9月調査)「4. 日常生活について ボランティア活動への参加」  
<https://www.gakken.co.jp/kyouikusuken/whitepaper/h201809/chapter4/17.html>
- 23 この傾向はすべての学年に当てはまり、1年次は男子23.0%に対して女子16.0%、2年次は男子17.0%に対して女子8.0%、3年次は男子19.0%に対して女子16.0%と学年ごとに参加の割合は変動するものの、学研調査ではいずれの学年においても男子の方がボランティア活動に積極的な姿勢が確認された。
- 24 ベネッセ教育総合研究所「高校生活と進路に関する調査」ダイジェスト版 (2015年11月発行) p.6.  
[https://berd.benesse.jp/up\\_images/research/koukouseikatsu.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/research/koukouseikatsu.pdf)
- 25 実際の調査項目では「博物館や美術館で作品に引き込まれたこと」「たくさんあった」「ときどきあった」と答えた生徒の割合を「ミュージアムへの訪問経験」としてカウントした。
- 26 晶文社学校案内編集部『首都圏 私立高校 大学附属校ガイド 2020年度用』(2019)では、系列大学の選抜性と内部進学率にある程度の関連が見られる。
- 27  $\chi^2 = 3.702$ ,  $df = 1$ ,  $p = .054$ .
- 28 一般的にこれらの活動は「習い事」として一括りにされがちであるが、「学外ボランティア」や

- 「ミュージアム訪問」に関しては「習う」という表現が適切ではないと判断したため、本稿では「課外活動」と総称する。
- 29 ベネッセ東大調査、p.19. 2018年次の「学校外の習い事やスポーツクラブ」データ参照（部活動、学習塾は除く）。
  - 30 学研調査（2018）内の「音楽教室（ピアノなど）」の参加割合を参照。
  - 31 参加有無について、調査票上の選択肢の「全くしない」を「不参加」、「年に1回程度」「半年に1回～月に1回程度」「2週間に1回以上」を「参加」としてカウントした。
  - 32 スポーツクラブ： $\chi^2=24.683$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , ボランティア活動： $\chi^2=0.025$ ,  $df=1$ ,  $p=.873$ , 音楽教室： $\chi^2=50.519$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , ミュージアム訪問： $\chi^2=85.404$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , 表現活動： $\chi^2=85.404$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , 地域行事： $\chi^2=24.626$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ .
  - 33 地域行事については「文化的な活動」であるかどうか議論が分かれるであろうが、本調査では「地域行事（お祭り等）」という文言で尋ねているため、地域の文化行事への参加という意味で「文化的な活動」として位置付けた。
  - 34 「全くしない」を「不参加」、「年に1回程度」「半年に1回～月に1回程度」「2週間に1回以上」を「参加」とカウントした。
  - 35 調査票では、1 = 0時間、2 = 1時間、3 = 2時間、4 = 3時間、5 = 4時間、6 = 5時間、7 = 6時間以上で尋ねたものを、今回集計時に0 = 0時間、1 = 1時間、2 = 2時間、3 = 3時間、4 = 4時間、5 = 5時間、6 = 6時間以上として選択肢と時間数が一致するように新たに振り当てた。
  - 36 学習時間について、調査票では、1 = 0時間、2 = 1時間、3 = 2時間、4 = 3時間、5 = 4時間、6 = 5時間、7 = 6時間以上で尋ねたものを、今回集計時に0 = 0時間、1 = 1時間、2 = 2時間、3 = 3時間、4 = 4時間、5 = 5時間、6 = 6時間以上として選択肢と時間数が一致するように新たに振り当てた。
  - 37 各種課外活動への参加有無で生徒を分け、平均学習時間を  $t$  検定したところ、スポーツクラブ： $t(4012) = 2.33$ ,  $p<.05$ , ボランティア活動： $t(4000) = 8.43$ ,  $p<.001$ , 音楽教室： $t(3991) = 4.17$ ,  $p<.001$ , ミュージアム訪問： $t(3995) = 5.56$ ,  $p<.001$ , 表現活動： $t(3999) = 4.60$ ,  $p<.001$ , 地域行事： $t(4015) = 1.39$ ,  $p=.163$ であった。
  - 38 平均値の差を  $t$  検定で検証した結果  $t(3951) = 3.816$ ,  $p<.001$ で有意であった。
  - 39 平均値の差を  $t$  検定で検証した結果  $t(3927) = 5.939$ ,  $p<.001$ で有意であった。
  - 40  $\chi^2$  検定を行った結果、スポーツクラブ： $\chi^2=4.455$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ , ボランティア活動： $\chi^2=33.536$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , 音楽教室： $\chi^2=14.605$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , ミュージアム訪問： $\chi^2=33.724$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , 表現活動： $\chi^2=11.842$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , 地域行事： $\chi^2=10.354$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ であった。
  - 41  $\chi^2$  検定を行った結果、スポーツクラブ： $\chi^2=28.652$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , ボランティア活動： $\chi^2=53.966$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , 音楽教室： $\chi^2=29.669$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , ミュージアム訪問： $\chi^2=19.287$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , 表現活動： $\chi^2=21.040$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , 地域行事： $\chi^2=5.491$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ で有意であった。
  - 42 1つ以上の課外活動に参加しているか否かを表す「課外活動有無」と通塾の有無を表す「学習塾有無」の変数を用いて4つの群に分けた。
  - 43 通塾の有無による平均学習時間について  $t$  検定を行ったところ、平日  $t(2332) = 18.348$ ,  $p<.001$ , 週末  $t(2380) = 14.903$ ,  $p<.001$ で有意であった。
  - 44  $M=1.20$ ,  $SD=1.169$ ,  $N=920$ .
  - 45  $M=1.36$ ,  $SD=1.106$ ,  $N=1,684$ .

- 
- 46  $M=2.12$ ,  $SD=1.434$ ,  $N=369$ .  
47  $M=2.09$ ,  $SD=1.370$ ,  $N=960$ .  
48 さらに、各群の差を確認するために多重比較を行ったところ、無活動群・通塾のみ群間および無活動群・両立群間、課外活動のみ群・通塾のみ群間さらに課外活動のみ群・両立群間では $p<.001$ 、なし群・課外活動のみ群では $p<.01$ で有意な差が示された。  
49  $M=1.53$ ,  $SD=1.521$ ,  $N=920$ .  
50  $M=1.89$ ,  $SD=1.534$ ,  $N=1,673$ .  
51  $M=2.58$ ,  $SD=1.901$ ,  $N=363$ .  
52  $M=2.64$ ,  $SD=1.794$ ,  $N=952$ .  
53 さらに、各群の差を確認するために多重比較を行ったところ、通塾のみ群・両立群間のみ統計的な有意差が確認できなかったが、そのほかの群間ではすべて有意な差が示された ( $p<.001$ )。

